
ただの 　　です。～私の名前は～【横書きです】

啄木鳥続樹（きつつきつつき）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただの です。私の名前は「横書きです」

【Nコード】

N2780Z

【作者名】

啄木鳥つづき続樹つづき

【あらすじ】

これは二人の主人公の話、遠距離恋愛ならず、遠距離の主人公達の話……付き合い、交差、戦闘、話し合いなど何かしらの人には出合いがある。そこで主人公達は何を思うか？嫌何を知るか？一人の学校は外来人の町にある日本人学校の問題とは？もう一人のいる学校はヤスマと読んでみんなから理想郷と信じて【安全町あんげまち】にと呼んであげている学校。という世界があったとしてもそんなあらすじはどうでもいい、問題なのはこの世界だ。例えば話をしよう。【あなた】たちは何者なんだ？答えは簡単だ。これを読む【あなた】は読者で

僕は作者だ。それが正体だよ。でもそれが奪われたらどうする？ 第三者の手に僕たちの関係が渡ったらどうする？ あなたが何者が捨てられたらどうする？ もう あなたは読者ではなくただの見物者だ。僕と君にはもう関係ある人物ではない。あなたは僕の本読む事はできない。だが第三者は読めるよ。第三者の正体が あなたになつたから僕は読まず事が出来るのは第三者という あなたに読ませますから。僕は 見知らぬ人 に本を読ませることができない。ただの名前泥棒ではなく、【名前】を掛けたただの未来の黒歴史ならぬ偽歴史かもしれないお話、お話、お話。 by 【傍観者】という平等に弱肉強食の世界で不幸も、同情も、幸せも、感情すらあたえないこそを平等と信ずる神様

題名言き話 知ってることは知ってる。ただそれが多いだけ（前書き）

自分の小説のページを開いてくれてありがとうございます。
皆様にご迷惑をしますがどうぞ楽しく読んでいてください。
ではどうも。

あゝ眠たく寝てたつもりなんだが逆に寝れねえ。

正直何を言ってるか分からんし。

まあ寝た振りでもいいだろそれでもいいだろ。

ただな。

肩こりかな。

すんごく針が入ってるようにいたい。

こいうことは何て言うっけ？あゝ思い出した。

視線ということか。

視線は確かオーラという未確認生物不特定多数陰湿乾燥質外側空気感染内部爆発的尖端超極細対最極太目からビームのことだな。

確か友人Aからこのライトノベルンルンの名言だなとか言ってたな
ゝ。

うん。

こんなに視線という見えないものが目をつぶってる自分に見えるっ
ておかしくないか？どんな方法だよ！！。

目つぶっても電気の明かりが軽く見えない現象か。

それよりこれ怖いよ。

ここはヘブンか！！

確か友人Aは女子の花園は男子禁制だけど女体化したらいいなとか
言ってたな。

花園って何だ？

じゃなくてヘブンはもう一つあったな。

確か友人Bはまず自分のお金がゲームの半分だけもっていたらゲー
ムカセットを半分こ出来るらしい。

そしたらみんなゲームが半分ずつ出来るね。

いいねゝみんなゲームしたらまずつながらないじゃないか！！っ
て友人Aが笑ってたな。

苦笑も笑いだからOKだ。

というよりゲームって何だ？

その前に略して不ムをどうにかしないとな。

どうする……これは後に目を開けたら終わりゲームだな。

簡単に言えば目を開けたら撃つぞ脅迫されている人質ってとこだな。

確か友人Bは“だるまさんが死んだ”って名付けいていたな。

ネーミングはいまいちだがどうしようかな。

こついうことなら低反発の枕持つてくれればよかった。

目線、視線、死線から護つてくれるしな。

夢に逃げよう。

うん。それがいい。

だが夢から逃げれない気がするけどね。

所詮はではなく人間の浅知恵ではなく、処線の方だな。

うん。浅くはないな。

深く沈められそうだ。不覚に。

というより……正直って、肩こりって、針って、電気って、ヘブン

って、お金って、女子って、男子禁制って、女体って、簡単って、

脅迫って、だるまさんって、友人Aって、友人Bって、人質って、

まくらって、目線視線死線処線って、深く不覚って

何？

嫌、分かってるのは視線だけか。不ムだしな。うん。

題名言葉話 知ってることは知ってる。ただそれが多いだけ（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。これからも応援よろしく願います。

題名言武話 でも知らないことは罪じゃない。理解できないのが罪だ。(前書き)

自分の小説のページを開いてくれてありがとうございます。
皆様にご迷惑をしますがどうぞ楽しく読んでいてください。
ではどうも。

題名言武話 でも知らないことは罪じゃない。理解できないのが罪だ。

〽別の入学式〽

もう一人の学生がそこに座っていた。

ただ単に話を聞いてるだけな話。

ここは魔法学院附属第三敷地高等学院の Assembly Hall
1という日本で言う体育館もしくは多目的ホールのような場所に集
まってる話だ。

「何でみんなで一齐に言うの!？」

「第三校長、君氏は日本人なのに何で英語でしゃべってるんだ。も
しくは君が。頭がおかしいのかな」

「ああああん!?何を言ってるのかな。日本語は喋るけど主に外国
で使う言葉が多いだけ。もしかしてお偉いさんはおかしいを英語で
は言えないのかな？」

「はっ。何を言っておる。我氏はそれぐら……おい聞け!!貴様
!!!」

「よし。あいつはいいとしてお〜い大丈夫
か?第二校長。お前のペット食われてるぞ。」

ライオンらしきものに食われたペンギンらしきものが汗とうよりよ
だれなのか涙なのか鼻水なのか分からないまま背伸びをしてライオ
ンの口をあけている。

「大丈夫キョ〜。教頭がきゅがまじめにしないから代わりに法動物
を出したら殺されそうになっているからな。助けてほしいきゅ〜。」

「そりゃ、マイクと違って話した部分が副会長のスカートの下だか
らな。それは怒られるしかないな。まあがんばれよ。それより第四
校長は?」

「今寝てます。というよ

り起きたところ見たことありません。」

「そうか？俺は普通話たことがあるけどな。いつもありがとって
言ってくれ。」

「分かり……ました。…そのように……言っておきます。」

「何かしたのかきゅ〜！！？？」 第三校長は何かしたのかきゅ

〜？ぎゅはああ〜」

「別にNo problemだよ。ただ遊びに言っただけよ」

「おいこら！！私を忘れるな！！みんな

の秘密言つぞ」

「それは我氏の台詞だ！！…… 第四校長…… 後は」

「誰も見捨ててないよ。…… 第四校長…… よろしく」

「きゅ〜は今教頭と戦ってる…… 第四校長…… お願いし
ます。」

カチツと何かがスイッチが押したみたいだ。第一校長のビジョンが
消えた。

そしてすぐに第三学校の電話が鳴った。ほかのビジョンにも電話が
来たみたいだ。でもその音『プリン、プリンやあなたに神が落ちま
したなど』が変だったのはスルーしたらしい。

『何で消すのよ！！私の話が聞けないじゃない。もう今から言うね。
これから皆さんは自分の学校決まりに従ってもらいますがそこで今
から自分達で【プライド】を決めてもらいます。例えば第一高校の
生徒は【理想】という題名で決めてもらいます。あなたの理想をか
けてこの学校生活をしてほしいです。正直にいいいます。あなた達は
まだ子供です。大人になったら楽しいことは沢山あります。でも甘
えることも目標すらもできないことがあります。でもここではそん
な常識にとわられない人生送ってほしいです。墮落であきらめ、嫉
妬で苦しみ、色欲におぼれ、暴食に明け暮れ、強欲に落ちて、憤怒
で全て壊すことしないでいただきたい。でも自分の理想があるな
らそれ向かって頑張ってください。あなたの小さい頃の理想をかな

えてください。子供は子供らしく理想を追ってください。それが子供の特権です。これが私の発言を終わらしたいと思います。ありがとうございました。』

一番うるさかった人達が静かになりそこから生徒達の顔つきも変わりそして盛大な拍手がはいった。終わりが見えないぐらいの勢いで歓声と拍手。人の上に立つ人はやはり言う事考える事も話すことも人は違うな。生徒でいるのも悪くない

自分の校長が何か言いそうだ

「Thank you for much. まあここで終わって各自自分の学校の話しようか。」

「そうね。また後でね。バイバイ。」

「後できゅゝ助けてキョ。」

「おい、我氏の話をして…といたいところだが第一校長に免じてこれで終わりにするか。」

「お前の話が告白の話なら聞いてやるぜ。そうじゃないならまた後でだ。see you later.」

「お、おい待て。」と聞こえ

たがもうそれは遅いようだ。

「Hero every one, My name is Si

kama Amakusa. Please called me

会長 or 校長 or SIKAMADA ISUKI. Do you

ou know? Do you remember? so,

I will speak about my school

future. はい。ここからは日本語な。英語出来た？ま

あだいたいこの学校のパンフレットに書いてあるとおりが多いな。

他の先輩達から聞いたと思うがこの学校は二年半で卒業出来て後は

termは五回ある。termは学期と思えばいい。ということは

examが五回もあるからな気をつけるよ。他には何か意見はない

か？」

そう我らが会長にして校長の天草塵駐。あまくさしかま

ジャグジーで昨日から俺のお父さんにもなった。こんな俺でも高校生になれるとは思わなかったな。そういえばあいつはこの学院に通ったのかだろうか？まさか試験という言葉すらも知らないとは思わなかったな。通ってるいいな。この世界は弱肉強食という世界で何人も捨てられる。努力より結果主義、使えないもの消える才能主義、弱肉強食に四捨五入して弱捨強入と無理やりすぎるが実際にそうでもある。俺も通ったことがすごいけどな。天武法師になることが許されない自分がこの世界で生きてるからな。ただ遠く見つめて何かものふけるというよりハラハラとは遠いものを感じたのであった。

題名言武話 でも知らないことは罪じゃない。理解できないのが罪だ。(後書き)

ここまで読んでくれてありがとうございます。これからも応援よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2780z/>

ただの です。～私の名前は～【横書きです】

2011年12月11日03時51分発行